



Title	感謝特性尺度邦訳版の信頼性および妥当性の検討
Author(s)	白木, 優馬; 五十嵐, 祐
Citation	対人社会心理学研究. 2014, 14, p. 27-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

感謝特性尺度邦訳版の信頼性および妥当性の検討^{1) 2) 3) 4)}

白木優馬(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

五十嵐祐(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究の目的は、感謝特性尺度(GQ-6; McCullough, Emmons, Tsang, 2002)の邦訳版を作成し、その信頼性、妥当性を検討することであった。大学生 216 名(男性 44 名、女性 172 名)を対象に調査を行い、探索的因子分析および確認的因子分析を行った結果、感謝特性尺度邦訳版は 1 因子 5 項目によって構成されることが明らかとなった。また、I-T 相関および α 係数を算出したところ、尺度は十分な内的整合性を持つことが示された。また、尺度得点は、外向性、促進焦点、一般的信頼感、心理的負債感と有意な正の関連を示し、感謝特性尺度邦訳版の基準関連妥当性が確認された。

キーワード：感謝、パーソナリティ特性、尺度作成、妥当性、信頼性

問題

本研究の目的は McCullough, Emmons, & Tsang, (2002)によって開発された、感謝の感じやすさを測定する尺度である、GQ-6(The Gratitude Questionnaire-Six Item Form)の邦訳版を作成し、その信頼性、妥当性を検証することである。

誰かからプレゼントをもらう、助けてもらうといった、利他的、向社会的な行為を受けるとき、日常生活の様々な場面で、我々は“感謝”(gratitude)と呼ばれる感情を経験する(蔵永・樋口, 2011a)。McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson(2001)は感謝に関する先行研究のレビューを通じて、感謝を“他者の道徳的行為に対する情動的反応”と定義した上で、感謝には 3 つの機能が備わっていると主張した。具体的には、(1)他者の道徳的な行為によって利益がもたらされたことに対する認知的反応としての“道徳的バロメーター機能”、(2)感謝を経験した個人の道徳的行動を促進する“道徳的動機機能”、そして、(3)感謝を表出された個人の道徳的行動を促進する“道徳強化機能”である。

McCullough et al.(2001)以降の研究は、特に“道徳的動機機能”と“道徳強化機能”について実証的な検討を行ってきた。例えば、Tsang(2006)は、ある他者の好意によって個人が利益を得た場合、個人はその他者に対する感謝を示すために、お返しとなる援助行動を進んで行うことを示した。また、この効果は単なるポジティブな気分に戻元されないことも示されている。この研究は、感謝が行為者への向社会的な返報を促進するという、二者間での感謝の効果を示すものである。一方、三者間での感謝の効果を示す知見もある。Bartlett & DeSteno(2006)は、実験に参加した個人の感情を操作して、ある他者(サクラA)に対する感謝感

情を喚起させた後、別の実験者(サクラ B)が、その個人に対して別の実験の参加を依頼するという場面を設定した。その結果、向社会的行動の行為者であるサクラ A への感謝感情を喚起された個人は、サクラ A とは全く関係のない第三者であるサクラ B の実験参加の依頼に対しても、協力的に振る舞うことが明らかになった。同様に、感謝を感じた他者から感謝の表出(e.g., "Thank you")を受けた個人も、感謝表出をした者や、それ以外の第三者に対して向社会的に振る舞うことが実証されている(Grant & Gino, 2010)。

以上の知見を統合すると、ある個人(行為者)が別の個人に好意的に振る舞うと、好意を受けた個人(被行為者)は感謝感情が喚起され、その後、行為者や第三者に対して向社会的に振る舞うことになる。また他方で、被行為者が行為者に感謝を表出した場合、被行為者から感謝の表出を受けた行為者も、その後、被行為者や第三者に対して向社会的に振る舞うことになる。Nowak & Roch(2006)は、シミュレーションによって上記のプロセスを検討し、向社会的な行為が社会的に伝播する可能性を明らかにしている。つまり、感謝は道徳的行為の行為者と被行為者双方の向社会的な行為を促進する機能をもつといえる。

さらに、感謝には、道徳的行為の行為者と被行為者の関係性を形成・維持・改善する効果もある。例えば、それほど親しくはない他者に対する信頼感は、その他者の道徳的行為に感謝することで高まる(Dunn & Schweitzer, 2005)。こうして高まった信頼感は、親しくはない他者との関係形成に寄与すると考えられる。このことを示唆する研究として、Algoe, Haidt, & Gable(2008)は、新入生と先輩との関係形成に感謝感情が与える影響を検討した。縦断調査の結果、先輩に対

して新入生が抱く感謝感情は、一ヵ月後の両者の関係性に対して正の影響を与えていた。すなわち、親密な関係が形成される前段階にある二者は、お互いの道徳的行為に対して感謝の感情を抱くことで信頼感が高まり、その後の関係形成が促されていくと考えられる。このように、感謝が二者間の関係性に与える正の影響は、親密な関係においても同様にみられ、パートナーが互いに感謝を感じ、その感情を表出することで、その後の関係満足がもたらされることが示されている(e.g., Algee, Gable, & Maisel, 2010; Lambert, Clark, Durtschi, Fincham, & Graham, 2010)。以上の知見は、向社会的行動の促進や、関係性の形成・維持・改善といった、二者間、三者間レベルでの相互作用における感謝の効果を示唆するものである。

一方、感謝を感じる個人のレベルでの効用としては、well-being の改善がある。Emmons & McCullough(2003)は、感謝介入の効果を検証するため、成人の実験参加者に、一週間にわたって指定された内容に関する日記をつけるよう求めた。その結果、単に日記をつけた場合や、イライラした出来事を記録した場合と比較して、日常的に感じた感謝を記録した場合は、実験参加者の心理的な well-being が向上していた。また、小学生を対象に同様の介入を行った実験でも、他の群と比較して、感謝を記録するよう求めた群において、学校での経験に対する肯定的な評価が高まっていた(Froh, Sefick, & Emmons, 2007)。これらの知見は、感謝介入が well-being の改善に有益な効果をもたらすことを示すものであり、近年は感謝介入のもつ臨床的な意義についても検討が行われている(Wood, Froh, & Geraghty, 2010)。

以上のように、感謝は向社会的行動を伝播させ、道徳的行為の行為者と被行為者の関係性を良好にし、個人の well-being を高めるというプロセスを通じて、幸福な社会の形成に重要な役割を果たすと考えられる。このようなプロセスの社会的な循環を促進するためには、個人が、いつ、どのような要因によって感謝を感じるかを明らかにすることが重要である。

先行研究はこの点について、感謝が喚起される状況に対する認知的評価に焦点を当てて検討を行ってきた。Tesser, Gatewood, & Driver(1968)は、道徳的行為の被行為者が抱く感謝感情が、(1) 行為者のコストが高く、(2) 被行為者にとって価値があり、(3) 行為者が被行為者のために想って行動したと認知されるほど、強く喚起されると指摘している。本邦における質問紙調査でも、これらの要因に関する認知が、感謝の喚起に重要であることが示されている(蔵永・樋口, 2011b)。

その一方で、個人が特定の状況で感じる感謝感情の

強さには、特性レベルでの個人差があることが指摘されている。感謝感情の抱きやすさを示す感謝特性を測定する尺度としては、GQ-6(McCullough et al., 2002)や GRAT(Gratitude Resentment and Appreciation Test; Watkins, Woodward, Stone, & Kolts, 2003)があり、海外の感謝研究では、GQ-6 が用いられることが多い。先行研究では、GQ-6 得点の高い個人が、低い個人に比べて、道徳的行為の行為者のコストや、被行為者にとっての価値、行為者の利他的な意図などを高く評価し、その結果、感謝感情をより抱きやすいことが示されている(Wood, Maltby, Stewart, Linley, & Joseph, 2008)。感謝感情に基づく向社会的行動の循環的なプロセスを促進するためには、感謝が喚起される状況についての検討に加えて、個人要因としての感謝特性の影響を考慮することが重要である。

そこで本研究では、感謝特性尺度 GQ-6 の邦訳版を作成し、尺度の信頼性および妥当性を検証することを目的とする。本邦における感謝研究の多くは、感謝が喚起される状況や、状況に対する認知的評価に関するものである(e.g., 蔵永・樋口, 2011b)。しかし、感謝は状況要因だけではなく、感謝感情の抱きやすさという特性レベルの要因によっても影響を受ける。したがって、感謝特性を測定する代表的な尺度の邦訳版を作成し、その信頼性と妥当性を明らかにすることは、本邦における感謝研究の今後の発展のためにも重要な意味をもつであろう。

感謝特性尺度の妥当性の検証は、海外の先行研究の知見に沿って行う。具体的には、Big Five の各下位尺度、負債感特性、自尊心、制御焦点、一般的信頼感との基準関連妥当性を検討する。先行研究では、感謝特性が外向性、協調性、誠実性、開放性と正の相関を持ち、神経症傾向と負の相関を持つことが示されている(McCullough et al., 2003)。さらに、他者から親切を受けた個人は、自身に対する敬意を感じ、自尊心が高まる可能性も示唆されている(McCullough et al., 2002)。本邦においても、感謝特性尺度得点の高い個人は、同様の傾向を示すことが予測される。

相互独立的な文化である、北米の大学生を対象とした調査では、感謝特性と、援助を受けた時にお返し義務を感じやすい程度である負債感特性との間に、安定した負の相関が示されている(e.g., Mathews & Green, 2010; Mathews & Shook, 2013)。しかしながら、相互協調的な文化においては、他者からの好意に対して負債感を感じやすく(Shen, Wan, & Wyer Jr, 2011)、特に日本では、他者の好意に対して、感謝と同時に、申し訳なさや負債感を感じやすい(e.g., 池田, 2006; 蔵永・樋口, 2011a; Wangman, 2005)。したが

って、本研究では、北米の知見とは対照的に、日本においては感謝特性と負債感特性の間には正の相関がみられると予測する。

また、本研究では、感謝特性との直接的な関連が示されているこれらの変数に加えて、制御焦点および一般的信頼との関連についても検討する。先行研究では、過去に受けた向社会的行動を回顧する際、利益追求のモードである促進焦点を活性化させることで感謝が喚起され、損失回避のモードである予防焦点を活性化させることで負債感が喚起されることが示されている(Mathews & Shook, 2013)。したがって、感謝特性は促進焦点的傾向と正の関連を示す一方、予防焦点的傾向とは関連を示さないことが予測される。また、あまり親しくない他者の道徳的な行為に対して感謝を抱くことで、その人物に対する信頼が高まるという知見(Dunn & Schweitzer, 2005)に基づくと、感謝特性の高い個人は、他者に対して感謝を感じる機会が多く、一般的な他者全般に対する信頼感が高い可能性がある。本研究ではこれらの予測に基づいて、感謝特性尺度邦訳版の基準関連妥当性に関する検討を行う。

方法

調査対象者

2013年10月から11月にかけて、愛知県内の大学生216名(男性44名、女性172名)を対象に質問紙調査を実施した。平均年齢は男性19.2歳($SD = 1.21$)、女性19.4歳($SD = 1.06$)であった。

質問紙の構成

感謝特性 GQ-6 (McCullough et al., 2002) の邦訳である感謝特性尺度邦訳版を作成して用いた。この尺度は6項目からなり、利他的な行為を受けた時に感謝を感じやすい程度を測定する尺度である。邦訳の手順としては、第一著者が日本語訳を行った後、英語圏への留学経験がある大学院生が日本語訳の適切性を判断し、項目の内容的整合性を確認した。調査の実施の際には、原版の尺度に即して、「以下のそれぞれの項目について、あなた自身にどのくらいあてはまるかを1から7の間で回答してください」という教示のもと、7件法(1. 全く当てはまらない～7. 非常に当てはまる)で回答を求めた。

パーソナリティ特性 Big Five 理論に基づくパーソナリティ特性の5次元を測定するため、TIPI-J(小塩・阿部・カトローニ, 2012; 10項目7件法)への回答を求めた。この尺度では、外向性、協調性、誠実性、神経症傾向、開放性をそれぞれ2項目で測定している。

負債感特性 利他的な行為を受けた際の負債感の感じやすさを測定するため、IS-18(相川・吉森, 1995;

18項目6件法)への回答を求めた。

自尊心 自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982; 10項目5件法)への回答を求めた。

制御焦点 促進焦点、予防焦点の強さを測定するために、PPFS 邦訳版尺度(尾崎・唐沢, 2011; 18項目7件法)から、利得接近志向(促進焦点)8項目、損失回避志向(予防焦点)8項目を抽出し、回答を求めた。

一般的信頼感 他者一般に対する信頼感を測定するために、一般的信頼感尺度(山岸・小見山, 1995; 6項目5件法)への回答を求めた。

結果

因子構造および信頼性の検討

感謝特性尺度邦訳版の因子構造を確認するために、6項目に対して探索的因子分析(最尤法)を行った。その結果、固有値の減衰状況(3.077, 1.097, 0.626, 0.530)および因子の解釈可能性から、1因子解が妥当であると判断した。その後、因子数を1に固定して同様に因子分析を行ったところ、項目6(「誰かに対して、または何かに対して感謝を感じるのは、時間がしばらくたってからだ」)の因子負荷量が.40未満であった。そのため、この項目を除外した5項目による因子分析を再度実施した結果、第1因子に対する5項目すべての因子負荷量が.40以上であることが示された。最終的に選定された項目と因子負荷量をTable 1に示す。

次に、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った。5項目1因子モデルの適合度指標のうち、RMSEAが高い値を示したが、他の適合度指標の値を考慮し($\chi^2(5) = 18.7, p = .002, AGFI = .906, CFI = .968, RMSEA = .114, AIC = 38.7$)、データに対する1因子モデルのあてはまりは妥当であると判断した。次に、感謝特性尺度邦訳版の信頼性を確認するために、I-T相関を算出した。その結果、感謝特性尺度邦訳版5項目のすべてにおいて、当該項目を除いた4項目の合計得点との間に、強い正の相関が見られた($r_s = .57-.76, p < .01$)。また、クロンバックの信頼性係数は $\alpha = .84$ であった。

以上の結果から、原版と異なり、感謝特性尺度邦訳版は1因子5項目によって構成されることが示された。また、尺度には十分な内的整合性のあることが確認された。

感謝特性尺度邦訳版の妥当性検討

邦訳版感謝特性尺度の基準関連妥当性を検討するため、感謝特性尺度邦訳版5項目の合計点を感謝特性得点($M = 5.66, SD = 0.90$)として、既存の心理尺度との相関係数を求めた(Table 2)。その結果、感謝特性得点は、外向性、負債感特性、利得接近志向、一般的

Table 1 感謝特性尺度に対する探索的因子分析の結果

項目	F1	h2	M	SD
1 私が今までに感謝したことすべてを数えようとしたら、きりがないだろう。	.88	.77	5.81	1.23
2 私の人生には感謝すべきことが多い。	.83	.69	5.74	1.08
3 ※世の中には、感謝すべきことは多くはない。	.67	.45	5.56	1.15
4 私は広くたくさんの人々に感謝している。	.63	.39	5.35	1.23
5 年を取るにつれて、自分の人生で出会った人々や出来事、境遇に対して、もっと感謝できると気付くようになるだろう。	.57	.33	5.79	1.07

注) ※は逆転項目を表す。

Table 2 感謝特性尺度邦訳版の基準関連妥当性の検討

尺度名	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	感謝特性得点との 相関係数(<i>r</i>)
外向性	3.91	1.45	.76	.18**
協調性	4.78	1.03	.36	.09
誠実性	3.32	1.17	.59	.13
神経症傾向	4.48	1.15	.41	.01
開放性	3.92	1.16	.50	.05
負債感特性	4.22	.50	.79	.36**
自尊心	3.04	.67	.85	.10
利得接近志向	4.62	.88	.82	.37**
損失回避志向	4.56	.93	.81	.04
一般的信頼	3.08	.71	.81	.24**

***p* < .01

信頼感と、弱～中程度の有意な正の相関を示していた。一方で、感謝特性得点は、開放性、神経症傾向、損失回避志向と有意な相関を示さなかった。以上の結果は、本研究の予測を概ね支持するものであった。

考察

本研究の目的は、GQ-6に基づく感謝特性尺度邦訳版を作成し、その信頼性、妥当性を検討することであった。因子分析の結果、1因子6項目からなる原版と異なり、感謝特性尺度邦訳版は、1因子5項目によって構成されることが明らかとなった。また、I-T相関および α 係数を算出した結果、感謝特性尺度邦訳版は高い内的整合性を持つことが示された。さらに、相関分析の結果、感謝特性尺度邦訳版は一定の基準関連妥当性を有していた。以上のことから、本研究で作成した感謝特性尺度邦訳版は、十分な信頼性、妥当性を持つことが示された。

本研究では、データに対するモデルの適合度を考慮して、感謝特性尺度邦訳版を1因子5項目で構成することが妥当であると判断した。原版であるGQ-6から削除された項目6(「誰かに対して、または何かに対して感謝を感じるのは、時間がしばらくたってからだ」)は、感謝を感じる頻度を測定するものであった。他の項目に比べて、この項目の因子負荷量が低かった理由としては、北米と東アジアの文化差の影響が考えられる。実際、GQ-6の中国語版では、本研究と同一の5項目による1因子構造が確認されている(Chen, Chen, Kee, & Tsai, 2009)。小さな贈物に対する反応を、相互協調的な文化である東アジア(香港)と、相互独立的な文化である北米(カナダ)で比較した実験(Shen et al., 2011)では、東アジアの実験参加者は自身の存在を他者との関係の中に位置づけるため、北米の実験参加者よりも、返報の義務、つまり負債感を感じやすいことが示された。これらの知見に基づくと、日本を含む

相互協調的な文化では、個人が他者から好意を受けた際に、はじめに負債感が喚起され、その後感謝を感じるという可能性が考えられる。そのため、日本人は、感謝特性が高くともすぐに感謝を感じるわけではないのかもしれない。したがって、こうした日本人の特徴が、結果としてこの項目(「誰かに対して、または何かに対して感謝を感じるのは、時間がしばらくたってからだ」)と他の項目との相関を低めた可能性がある。この解釈の妥当性については、文化比較をすることによって今後検討されることが望まれる。また、原版では、項目 6 は逆転項目として設定されていた。本研究ではこの項目と他の項目との相関が低く、逆転項目としてとらえられていなかった可能性もある。さらに、本研究は一時点のみの横断調査であるため、二時点以上の調査によって、感謝特性尺度邦訳版の再検査信頼性を検討することも今後の課題である。

感謝特性尺度邦訳版の基準関連妥当性に関しては、感謝特定得点と、Big Five の下位尺度である外向性、誠実性との正の相関がみられるという予測が支持された。原版である GQ-6 については、外向性が高い個人ほどポジティブな感情を経験しやすいため、感謝というポジティブな感情も同様に感じやすいという予測がなされ、この予測を支持する結果が得られている (McCullough et al., 2002)。感謝特性尺度邦訳版の知見は原版と同様の傾向を示しており、本尺度が一定の妥当性をもつことを示すものである。

他方で、先行研究では、感謝特性得点と協調性、誠実性、開放性との間に正の相関が、神経症傾向との間に負の相関があることが示されていた。それにもかかわらず、本研究ではこれらの結果は再現されなかった。その原因としては、相関の希薄化の影響が考えられる。本研究では、回答者の負担を考慮し、TIPI-J を用いて Big Five の下位尺度を測定した。TIPI-J は、多様な側面を含む各下位尺度の構成概念を 2 項目で測定することを目的とするため、内的整合性を示す α 係数の値は低くなる傾向がある (小塩他, 2012)。補助的な分析として、相関係数の希薄化の修正を行った結果、感謝特性得点と協調性 ($r = .13, p < .10$)、誠実性 ($r = .18, p < .05$) との相関が確認されたが、今後は、より多くの項目で Big Five を測定する他の尺度 (e.g., 和田, 1996) を用いて、本尺度の妥当性を検討することが必要であろう。ただし、開放性と神経症傾向に関しては、原版を作成した McCullough et al. (2002) においても、感謝特性との相関がみられる場合とみられない場合があり、結果が安定していない。したがって、感謝特性とこれら 2 つのパーソナリティ特性との関連については、慎重に議論する必要がある。

また、本研究では、感謝特性得点と負債感特性との間に正の相関がみられた。この結果は、日本においては、他者からの好意を受けた際、感謝と同時に負債感を感じやすいという先行研究 (Wangman, 2005) の知見を再現しており、感謝特性尺度邦訳版の一定の妥当性を示しているといえる。同様に、感謝特性得点と利得接近志向、一般的信頼感との間にも、有意な正の相関が見られた。先行研究 (Mathews & Shook, 2013) では、促進焦点の活性化によって、状態レベルでの感謝が喚起されることが示されている。本研究の知見は、状態レベルだけでなく、特性レベルでも感謝特性と促進焦点との関連が示されたという点で重要な意義がある。

一方、原版では、親切のように感謝を喚起する他者の行為が、親切を受けた被行為者の自身に対する敬意を喚起し、自尊心や他の心理的健康を高める可能性が示唆されていた (McCullough et al., 2002)。しかし、本研究では感謝特性得点と自尊心との間に明確な関連は示されなかった。今後は、他の well-being の指標を用いて、感謝を経験することが全般的な心理的健康を高めることにつながるかどうかを実証していくことが重要であろう。

引用文献

- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, 11, 63-72.
- Algoe, S. B., Gable, S. L., & Maisel, N. C. (2010). It's the little things: Everyday gratitude as a booster shot for romantic relationships. *Personal Relationships, 17*, 217-233.
- Algoe, S. B., Haidt, J. & Gable, S. L. (2008). Beyond reciprocity: Gratitude and relationships in every life. *Emotion, 8*, 425-429.
- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science, 17*, 319-325.
- Chen, L. H., Chen, M. Y., Kee, Y. H., & Tsai, Y. M. (2009). Validation of the Gratitude Questionnaire (GQ) in Taiwanese undergraduate students. *Journal of Happiness Studies, 10*, 655-664.
- Dunn, J. R., & Schweitzer, M. E. (2005). Feeling and believing: The influence of emotion on trust. *Journal of Personality and Social Psychology, 88*, 736-748.
- Emmons, R. A., & McCullough, M. E. (2003). Counting blessings versus burdens: An experimental investigation of gratitude and subjective

- well-being in daily life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 377-389.
- Froh, J. J., Sefick, W. J., & Emmons, R. A. (2008). Counting blessings in early adolescents: An experimental study of gratitude and subjective well-being. *Journal of School Psychology*, **46**, 213-233.
- Grant, A. M. & Gino, F. (2010). A little thanks goes a long way: Explaining why gratitude expression motivate prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **98**, 946-955.
- 池田幸恭 (2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, **54**, 487-497.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011a). 感謝の構造—生起状況と感情体験の多様性を考慮して— 感情心理学研究, **18**, 111-119.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011b). 感謝生起状況における状況評価が感謝の感情体験に及ぼす影響 感情心理学研究, **19**, 19-27.
- Lambert, N. M., Clark, M. S., Durtschi, J., Fincham, F. D., & Graham, S. M. (2010). Benefits of expressing gratitude to a partner changes one's view of the relationship. *Psychological Science*, **21**, 574-580.
- Mathews, M. A., & Green, J. D. (2010). Looking at me, appreciating you: Self-focused attention distinguishes between gratitude and indebtedness. *Cognition and Emotion*, **24**, 710-718.
- Mathews, M. A., & Shook, N. J. (2013). Promoting or preventing thanks: Regulatory focus and its effect on gratitude and indebtedness. *Journal of Research in Personality*, **47**, 191-195.
- McCullough, M. E., Emmons, R. E., & Tsang, J. (2002). The grateful disposition: A conceptual and empirical topography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 112-127.
- McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude moral affect? *Psychological Bulletin*, **127**, 249-266.
- Nowak, M. A., & Roch, S. (2007). Upstream reciprocity and the evolution of gratitude. *Proceedings of The Royal Society*, **274**, 605-610.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, **21**, 40-52.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性: 制御焦点理論に基づく検討 心理学研究, **82**, 450-458.
- Shen, H., Wan, F., & Wyer Jr, R. S. (2011). Cross-cultural differences in the refusal to accept a small gift: The differential influence of reciprocity norms on Asians and North Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 271-281.
- Tesser, A., Gatewood, R., & Driver, M. (1968). Some determinants of gratitude. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 233-236.
- Tsang, J. (2006). Gratitude and prosocial behavior: An experimental test of gratitude. *Cognition and Emotion*, **20**, 138-148.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- Wangman, J. (2005). 日本とタイの大学生における感謝心の比較研究(2) 日本道徳性心理学研究, **19**, 1-12.
- Watkins, P. C., Woodward, K., Stone, T., & Kolts, R. L. (2003). Gratitude and happiness: Development of a measure of gratitude, and relationships with subjective well-being. *Social Behavior and Personality*, **31**, 431-452.
- Wood, A. M., Froh, J. J., & Geraghty, A. W. A. (2010). Gratitude and well-being: A review and theoretical integration. *Clinical Psychological Review*, **30**, 890-905.
- Wood, A. M., Maltby, J., Stewart, N., Linley, P. A., & Joseph, S. (2008). A social-cognitive model of trait and state levels of gratitude. *Emotion*, **8**, 281-290.
- 山岸俊男・小見山尚 (1995). 信頼の意味と構造—信頼とコミットメント関係に関する理論的・実証的研究— 株式会社原子力安全システム研究所 INSS Journal, **2**, 1-59.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

註

- 1) 本研究の一部は、名古屋大学教育発達科学研究科五十嵐祐研究室のプロジェクトの一環として実施されたものです。調査にご協力いただいた皆様に御礼を申し上げます。
- 2) 原著者の Michael E. McCullough 教授(University of Miami)には、本研究の実施にあたり、尺度邦訳の許可を頂きました。記して感謝いたします。
- 3) 分析に際し、石井秀宗先生(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)にご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

- 4) 尺度の邦訳にあたり、服部壮一郎さん(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)にご協力いただきました。

Development of the Japanese version of the trait gratitude scale

Yuma SHIRAKI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Tasuku IGARASHI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

This study developed the Japanese version of the Gratitude Questionnaire (GQ-6; McCullough et al., 2002) and examined its reliability and criterion-related validity. A total of 216 undergraduates (44 men, 172 women) completed a questionnaire. The findings of exploratory and confirmatory factor analysis showed that the scale was composed of one factor with five items. The Item–Total correlations and the Cronbach's alpha coefficient indicated acceptable reliability of the scale. The score of the scale was positively correlated with extraversion, promotion-focus orientation, general trust, and indebtedness. This result suggests criterion-related validity of the Japanese version of Gratitude Questionnaire.

Keywords: gratitude, personality, scale development, reliability and validity.